

会員研究

家康の三女・振姫の波瀾の生涯

竹村紘一

振姫は徳川家康の三女。母は徳川家康の側室の於都摩の方。甲斐の武田一族である秋山越前守虎康の娘で、穴山信君（梅雪）の養女となり、家康の側室となる（養父・田信玄を尊敬していた家康が側室に武田の血族を求めていたため、表向きは武田信玄の末娘として、信君の養女となり、家康に與入れたともいう）。家康の側室の中でも最も家格が高かつた。家康との間に五男・万千代を生む。後に二十万石を与えられ、水戸家に封ぜられた武田信吉である。武田氏再興の夢を託された信吉であつたが、生來の病弱もあり二十一歳で後嗣無く早世した。後に家康の九男の頼房が水戸家を繼ぎ御三家となつた。異説として母は武田家の旧臣である市川昌永の娘（良雲院）

ともされるが、定かではない。

文禄四年（1595年）二月に豊臣秀吉の命により、蒲生氏郷の嫡男・秀行と婚約、慶長三年（1598年）十一月五日に輿入れをした。

振姫の方が三歳年長であったが、夫婦仲は良く、秀行との間に忠郷、忠知の二男と一女を儲けた。一女は後に、肥後の加藤忠広（加藤清正の三男で兄の早世後に家督を継ぐ）の正室として嫁いだ。

蒲生家は氏郷の死後、嫡子・秀行が幼少の故に、父・氏郷の要衝の地である会津の大封を継承するのに秀吉が疑問を有したため問題が生じた。この時、太閤・秀吉の下した裁定は、会津領を收公して、改めて近江に二万石を与えるといふものだったが、関白秀次が会津領の相続を認めたことにより、一転して会津九十二万石の相続を許された。縁戚の前田利家や利家の

依頼を受けた徳川家康の奔走があつたという。この一件で太閤と関白による二元統治の問題が露呈されたことは、同年に発生した秀次の事件の一因とされている。

その後、秀吉の命で徳川家康の娘・振姫を正室に迎えることを条件に改めて会津領の相続が許されたが、若年の秀行は父・氏郷に比べて格段に器量に劣り、そのため家中を上手く統制出来ず、遂には重臣同士の対立を招いて御家騒動（蒲生騒動）が起こり、慶長三年（1598年）に秀吉の命で会津九十二万石から宇都宮十二万石へと大減封の上で移封された。蒲生家には大身の家臣が多くそれぞれが叩き上げの猛者で氣骨があり、一代の英雄であつた氏郷没後は争いごとが絶えなかつたという難治の家であつた。

慶長五年（1600年）の関ヶ原の戦いでは義父である徳川家康の東軍に与し、本拠の宇都宮で上杉景勝（秀吉に旧蒲生領の会津を与えられた五大老の一人で西軍側に付き会津征伐の発端となつた）の軍を牽制した。戦後、その軍功によつて没収された上杉領の内から、陸奥に六十万石を与えられて

会津に返り咲いた。秀行は家康の娘・振姫と結婚していたため、江戸幕府成立後も徳川氏の一門衆として重用された。器量においては凡庸という評価が一般的になされているが、父は氏郷、母は信長の二女（相応院、冬姫）の名が伝わるが典拠は不明で実名や通称は不明（いうのが正しい）である。蒲生騒動の背景には、蒲生氏の減移封を目論んでいた秀吉及び石田三成らが騒動を裏で操つて秀行を陥れたという説もあり、秀行の年齢・器量のみが原因と断定するには疑問が残る。まずは無難な武将と見て良かろうと思われる所以である。

ところが、夫・秀行が慶長十七年（1612年）に三十歳の若さで急逝した。長男・忠郷が跡を継ぐも後見していた振姫と筆頭家老岡半兵衛重政との間で藩政を巡つて対立が激しくなり、結果、父・徳川家康の命により岡半兵衛重政は駿府に呼び出されて切腹を命ぜられた。振姫と筆頭家老の岡半兵衛重政とが石塚観音堂の復興を巡つて衝突し、振姫が家康に讒言して重政を死に追い込んだともいわれるが、重政の処刑は、有力大名家の有能な家老の存在を煙たく

思つた幕府の考え方であつたとも考えられる。

元和元年（1615年）、父・

徳川家康の命により振姫は浅野長晟と再婚させられることとなり、幼少の子供を置いて蒲生家を去ることになる。豊臣秀吉の正室・北政所の義弟であつた浅野長政の二男で嫡兄・幸長の弟であり、慶長十八年に兄・幸長が嗣子無いままで病死するとその跡を継ぎ、当時は、兄の遺領の紀伊一国三十七万六千五百石を与えられ、和歌山城主であった。家康としては、何としても味方に付けたい浅野家であった。襲封の際に、長晟が豊臣氏と縁が深いので、三男の長重を押す声もあつたが、家康が長晟に決めたという話もある。何故か、家康の信頼が厚かつたのであろう。

一方の長重自身も家康の覚えは良く、秀忠には小姓として仕え信頼は厚かつたという。どちらが、浅野本家を繼ぐかは紙一重であつたと思われる所以である。

播州赤穂の浅野家は浅野長政の三男・長重の嫡男・長直が初代で、長友、長矩と続き、長矩の代で断絶することになる。播州赤穂浅野家が三代五十年と言われるゆえん

である。

長晟は慶長十九年（1614年）

の大坂の冬の陣、翌二十年（1615年）の夏の陣には徳川方として参戦し、和泉の樺井の戦いでは、部下で殿軍を務めていた龟田大隅

が本軍を離れて功に逸り大野治房を主将とする本軍を離れ突出して来た堀直之と淡輪重政を浅野氏重や上田主水正重安等の協力を討ち取り、岡部則綱を敗走させる功績を挙げたが、紀伊国内では、大坂方の画策による、北山一揆、紀州一揆と土着勢力の相次ぐ蜂起に遭い、戦後、すぐに領内に戻り一揆の鎮圧に忙殺された。大坂方は一揆の蜂起を合図に攻撃する作戦であつたが、功に逸る先鋒大将等があつたが、功に逸る先鋒大将等が先陣争いに終始し戦機を逸したとされている。

元和五年（1619年）、豊臣恩顧の大名であつた福島正則が居城広島城の無断改築の罪を問われて改易されると、その後を受けて安芸広島四十二万六千石を領して広島城主となる。山陽道の要衝を預かる豊臣恩顧大名の筆頭格の福島家は幕府がいずれは取り潰すことになつていたとされ、家康が

たとも言われている。無断改築は単なる理由付けに過ぎないものであつた。武家諸法度を知る正則は事前に將軍秀忠の側近本多上野介

と正純による福島家取り潰しの謀略であつたと思われる。福島潰しが先にあつたと思われる後味の悪い事件であつたが、將軍家の威光は凄まじいものとなり、諸大名では幕府に抑え込まれて徳川政権が確立する契機となつた。

元和二年（1616年）四月に、元和二年（1616年）四月に、父の遺領のうち備後を生むも高齢出産による無理が祟り、その十六日後に亡くなつた。享年三十八歳。和歌山吹上寺で火葬され京都の金戒光明寺に葬られ、後に、広島正清寺に改葬された。その報を聞いた息子の蒲生忠郷は会津の融通寺に寺領を寄付している。法名は正清院。後に紀州に移封した家康の十男・徳川頼宣三女が忠臣蔵で有名な播州赤穂城主の浅野長矩に嫁いだ瑞泉院（阿久里姫）である。

尚、浅野氏の方は現在に至るまで振姫の子孫が続いているが、蒲生氏の方は息子二人が夭折し無嗣改易、娘の嫁いだ加藤氏も後に謀反の疑いで改易させられるなど不幸な結果となつてゐる。

め、浅野本家を繼ぐことは許されなかつた。浅野本家の家督を継いだのは正室の子である異母弟・光晟であつた。

光晟は二男ながらも振姫の所生であつたので、福島正則改易の後を受けて和歌山から広島に移つて四十二万石の広島藩主となる。広島浅野家は、振姫の直系となり、徳川将軍家の親族となり、その後も優遇されることになる。

長男ながらも側室の子とされた長治は、寛永九年（1632年）十一月二日に父の遺領のうち備後国三次郡と恵蘇郡に五万石を分け与えられて、ここに三次藩を立藩し、その初代藩主となる。その後、三次藩の基礎を築き、名君として三次の歴史に名を残した。長治の三女が忠臣蔵で有名な播州赤穂城主の浅野長矩に嫁いだ瑞泉院（阿久里姫）である。

尚、浅野氏の方は現在に至るまで振姫の子孫が続いているが、蒲生氏の方は息子二人が夭折し無嗣改易、娘の嫁いだ加藤氏も後に謀反の疑いで改易させられるなど不幸な結果となつてゐる。